

第三百二十三回 青葉会

平成二十五年二月二十八日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

石川清 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

福島正明 山崎亜也

〈投句〉

伊賀山そらお 小川恭延 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山内天牛

渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 村田くに子 山崎青史

山内天牛 山本三恵

《選者吟》

産土神(うぶすな)の梅見に集ひ喜寿祝 万里子 (龍・ゆ・三)

二月早や墓へも手作りチョココレト 全 (灯・正)

如月や手作りチョコを亡きひとへ 全 (隆)

梅東風(うめこぜ)や絶好調のジャグリング 全

薄氷(うすらい)やバリバリと刺す静電気 全

《互選句》

七点 ☆メール待つバレンタインの昼下がり 五郎太 (万・忠・弘・ゆ・灯・隆・允)

六點 ☆塗りたての横断歩道風光る 一灯 (万・忠・弘・亜・天・三)

五点 マフラーの色変え春の風を待つ ゆたか (清・猛・弘・く・亜)

☆箴(おき)走る音軽やかに春立てり 一灯 (万・紀・五・龍・允)

富士見ゆる礁(いくり)の飛沫実朝忌 全 (孤・允・正・亜・三)

春光や片目瞑つて鬚を剃る 正明 (五・弘・ゆ・灯・三)

袖人(そまうど)の髪に飛雪や山唸る 一灯 (紀・猛・孤・三)

四点 春愁や行方不明の解毒剤 正明 (忠・孤・弘・天)

☆團十郎彼岸に立ちて豆撒くか 天牛 (万・孤・隆・允)

三点 ☆時忘れ足湯に浸かる梅日和 さらお (万・五・敏)

友の絵と暫しの対話春浅し 清 (龍・敏・ゆ)

つちふるや弔辞咳き上ぐ菊五郎 紀久男 (堅・忠・天)

校舎よりコーラスの声春きざす 恭延 (猛・允・青)

路地裏もデートスポット猫の恋 忠彦 (清・允・三)

☆山盛りのしらす崩して夕餉かな 五郎太 (万・亜・三)

☆草の芽や高橋お伝の碑の隅へ 弘子 (万・正・青)

(青…毒婦と草の芽の対照がいい。「碑の隅へ」は「く」がいい。「に」は説明的と嫌う人がいるが、この場合は「に」がいい)

春の瀬戸赤を極めて夕陽落つ 健介 (堅・清・猛)

春の雪すぐ止み傘を置き忘る 恵洲 (亜・青・天)

飛び六法で去りし弁慶春浅く 全 (敏・灯・正)

☆雪降る夜詩集繙き閑吟す ゆたか (万・敏・灯)

市川團十郎追悼 全 (堅・紀・五)

還らざる寒の大河や巨星落つ 正明 (忠・弘・青)

原発や故郷と云ふ蜃気楼 全

(青…蜃気楼になつてしまった故郷が哀しい)

二点 夕闇に道の駅の灯雪しきり さらお (清・猛)

春の舞い叶わず逝くや團十郎 清 (堅・隆)

☆春の雪見馴れぬ禽(とり)も餌台に 紀久男 (万・正)

(渡り鳥の白腹やコゲラ)

霜柱足に優しく崩れけり
帰り船今朝のいかなご漁いかに
☆ 忌み明けや笑顔もどる春炬燵

(☆中七↓笑顔のもどる)

新築の大功の笑声梅香る

神杉(しんさん)の幹むささびの爪の痕

(高尾山)

春の闇宇宙の底にある不穩

恋猫の澄まし顔して帰館する

にぎり湯にはだへ沈めて春の雪

鯨焼く太りし白子もまたよろし

料峭や透明ころもの無縁仏

公魚(わかさぎ)をからつと揚げて酒の友

白梅に時(季)を告げられ目が覚めり

梅咲くや賑ひ戻る木挽町

團十郎命燃やして春に逝く

白梅の芳しき家気品あり

追儼(ついざ)の日三升(みます)の豆や時なき世へ

(節分に急逝した團十郎の遺句を踏まえている)

青春やほろ苦きもの露の臺

春暁の光走るや風の土

朝靄に彼岸桜も白く浮き

梅薫る「雷電」強く謡ひけり

(菅丞相)

☆ 平らかに関東ロームの霜解くる

母と似し姉と仰ぐや朧月

子ら作る口一杯の恵方巻

悪人が居座つてゐる雛の部屋

(孤…下五「雛(ひいな)の間」の方がよいのでは)

朗らなり豆撒き終えた茶の間かな

不二の嶺(ね)の稜線滲みて春兆す

春寒や神田藪蕎麦店を焼く

列島の空不安なり霾(よ)をぐもり

恭延 (亜・三)
健介 (五・天)
堂哉 (万・三)

全 (く・青)
一灯 (孤・ゆ)

正明 (紀・龍)

昇 (猛・忠)

亜也 (敏・灯)

全 (龍・ゆ)

盛雄 (堅・正)

清 (敏)

全 (龍)

紀久男 (隆)

全 (隆)

忠彦 (紀)

全 (清)

全 (堅)

五郎太 (青)

五郎太 (紀) は対象をボヤケさせる恐れがある)

弘子 (万)

全 (三)

ゆたか (清)

正明 (孤)

規雄 (紀)

亜也 (五)

天牛 (隆)

盛雄 (紀)

● 次回青葉会

三月二十八日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲ 当季雑詠五句 投句二句

四月二十五日(木)

五月二十三日(木)

以上 文責 紀久男

平成二十五年二月句会報

一 万里子先生以下11名出席。投句9名。猛さんの披講・合評の進行役で御覧のように五郎太さん、一灯さん、ゆたかさん、正明さんが好成績でした。先生からおつまみ(濡れ煎餅・マシユマロ・チーズおかし)、弘子さんの虎屋の羊羹(ミニ)、正明さんの諸焼酎黒麹(佐賀)「魔界への誘い」忠彦さんの「一の蔵」純米吟醸(宮城)、小生の純米「雪中梅」(新潟)を賞味しつつ、次期日銀総裁・團十郎急逝と歌舞伎界、隕石落下、熱気球落下、グアム通り魔事件等話題にし乍ら快調に飛ばしました。

二 関係者近詠

林檎もて永久の愛授受師句羨し 万里子 年玉や幼きときの五円玉 規雄
 日向ぼこ幼馴染の寡婦鰥夫 全 十二月八日あの靴音は胸奥に 大石悦子選
 屋上の木に鼻の独り言 全 喪葉書の重さが伝ふ今朝の冬 盛雄
 短日や受診最中へ激震来 全 毎日新聞「兵庫文芸」一月十六日 和田悟朗選
 海彼から地震見舞や寒波急 全 喪葉書の重さが伝ふ今朝の冬 盛雄
 冬至暮れ都心行きバス客一人 全 軒下の写楽の鴈の爪 孤舟
 叱られて寄り添ふ姉妹冬休み 全 空曳き絞り雪吊の組み上がる 全
 靴下を脱ぎたがる児や聖夜劇 全 剥製の鷹の眼光冬の雷 全
 壺へ塩さらさら無音去年今年 和夫 転生のもしあるとせば青鷹 全
 隣家から児らの雄叫び空つ風 全 古寺巡礼ほとけも吾もそぞろ寒 盛雄
 初霜や選挙終はりし静けさに 全 お眸を病む鑑真和上冬北斗 全
 鱈酒に口もこころも滑りさう 弘子 予測超ゆ入院告知夜寒かな 健介
 鉄柱のペンキ厚塗り駅の冬 全 身体に管の入りたる夜長かな 全
 鉛筆のよく滑る紙冬ぬくし 恭延 身体に管の入りたる夜長かな 全
 夕空が枯木の影を映し出す 全 身体に管の入りたる夜長かな 全
 菊五郎の「籠釣瓶」 全 身体に管の入りたる夜長かな 全

息を吞む次郎左の殺気冴え冴えと 紀久男 アフリカの笑ふ仮面や花の冷え 正明
 忘年や互みに齡ただしあふ 忠彦 人生の余白に薫るフリージア 全
 犬の絵は今日を限りの古曆 全 点描派のやうに鳴く蝸 全
 一 「萬緑」三月号 一 ポインセチアガザに暫しの平和来て 全
 盛り塩の浮き上がりたる春灯 允章 初鏡恋の予感を映し出す 全
 下萌に大地の弛ぶ気配かな 全 歌舞伎座は落成間近春隣 堂哉
 佳酒佳肴浅草寺裏春の宵 惠洲 ぼたん雪ネオン揺蕩ふ道頓堀 全
 静電気着換えの度や春浅く 全 星二つ落ちて余寒の松竹座 全
 齒と舌と目で愛づ浅漬け春キャベツ 全 勘も團も居らぬ今年の春寒し 全
 酒処さんじ(二月末閉店) 全 春待てず逝くや二人の大看板 全
 一 大鉄会二月 全 鮎子煮る夜なべの妻の愉しげに 全
 一 「俳句界」二月号。二頁に亘る「爽樹」 全 鮎子は友の輪つなぐ「ありがとう」 全
 一 「俳句界」二月号。二頁に亘る「爽樹」 全 この春も笑顔と手品被災地に 全
 一 「俳句界」二月号。二頁に亘る「爽樹」 全 のどけしやお先にどうぞ七十五(歳) 全

三 俳句雑誌より目についた作品

熱爛の夫にも捨てし夢あらむ 西村和子 眠る山遙か見通し津波跡 有馬朗人
 哭くまいぞサイタクラに哭くまいぞ 黒田杏子 神帰る鳥居のみなる津波跡 全
 瓦礫みな人間のもの犬ふぐり 高野ムツオ 輪飾の羽搏いてみる瓦礫かな 鍵和田柚子
 一 「俳句あるふあ」12〜1月号(20周年記念号) 全 雪吊や津波の松を忘れ得め 全
 一 「俳句」1月号 全

追悼 丸谷才一 ● 凧や旧仮名でいふさやうなら 長谷川權

『俳句』12月号。追悼文に歌仙の最後の巻を紹介している。「ずたずたの心で春を惜しみけり」(權)に付けて「敢へて飾るか旧曆の雛」(丸谷玩亭)。亡くなる三か月前に硯の形見分けの小包。その添え状に「わたしの晩年は俳諧のおかげでずいぶん楽しいものになりました。御厚情感謝します。ありがとうございます」

四 團十郎が急逝した節分はたまたま河東節演奏会があり、最後に全員で「助六」を唄いました。打

上げの席上、同丈の病状の事は触れないことに主治医以下同席者は決めておりました。息を引取ったのは宴終了30分后でした。弔慰表して下さった各位に深謝申し上げます。

●梅匂ふ柩に助六衣裳入れ ●節分や弁慶役者遂に逝く

平成二十五年三月十日

紀久男記